

白 翠

帆 走 部 部 報

昭和十七年四月

第 一 號

卷頭の辭

帆走部長

高須鶴三郎

本學に於ては昭和十六年度始に於て報國會が組織せられ、在來の体育聯盟運動各部は其の性質に従つて國防部若くは鍛鍊部の一部として更生する事になつた。我が帆走部も當初學内振興委員諸教授の充分なる認識なく、一先づ漕艇部の『ヨット班』として更生したのであつたが、東北ヨット協會より六隻の艇の寄附などあり、漸く振興委員の認むる所となつて五月、國防部の獨立の一部として漕艇部等と對等の豫算を得て堅實なる發足をする事になり、六月二十二日にはパークホテル前にて熊谷報國會長、海軍人事部長代理設樂海軍特務中尉臨席の下に、嚴肅裡にもなごやかな發會式を舉げ、更に七月二十日及び同二十八日の全國「海の記念日」には鹽釜に於て漕艇、水泳、和船と共に我が帆走部も壯快なる參加をなし、九月二十二、三日の明治神宮大會には横濱ハーバーに於て嚴肅なる參加を行ひ相當の成績を收めた。其の間學生課に於て終始充分なる理解の下に快き援助を惠まれた事は感謝にたえない次第である。

抑も報國會鍛鍊部の一部としての帆走部は在來のゴルフと同列の『ヨット部』とは其の精神を異にし、何處迄も眞摯なる海事國防精神を目的とし、軍事教練同様の緊張振りを要求されて居る此の点を部員並に先輩諸君は充分理解して置いて貰ひ度い。幸にして我が帆走部員は『ヨット俱樂部』時代より明朗眞摯なる學生のみにして、常に學生課の信頼厚く其の間一度も弊害を生じた事なく、報國會の改組しない前から報國會同様の精神が實現されて來た事は眞に悦ばしい事と思つて居る。庶幾くは向後共此の美しい傳統を持續し、至大至純の海洋の感化裡に、剛健なる海事國防精神の涵養が行はれんことを。

些か本部更生の精神と所懐とを述べて本誌卷頭の辭とする。



白 翠【第一號】目次

卷 頭 の 辭	部長 高須 鶴三郎
創業よりヨット部成立前後まで	保田 虎之助 一
報國會帆走部設立の経緯	矢 吹 禎 男 六
ヨット 初見 参	重 倉 珉 祐 九
無 題	勝 屋 弘 知 一〇
思 ひ 出	小 野 一 一三
便 り	和 田 禮 四 郎 一三
帆 網 を 想 ふ	後 藤 洗 一四
第十二回神宮大會水域對抗戦出場記	小 野 弘 智 一六
M . M	磯 邊 浩 策 二〇



春の潮	佐々木 宏三
彼のリーベは	太田 和夫 二三
中支より歸りて	小池 泉 二七

記	録
昭和十四年度記録「九州遠征記」	開部式祝辭
昭和十五年度記録	開部式答辭
昭和十六年度記録	
昭和十七年度記録（六月まで）	
小野 弘 智 三〇	末廣海軍大佐 五〇
末松 茂 實 三	矢吹 禎 男 五一
中 尾 良 三五	
中 尾 良 四七	

編輯後記	名簿
	五二